

特集「身近になる情報システム—理論と実践—」の編集にあたって

刀 川 眞^{†1}

情報システムはコンピュータやソフトウェア・プログラム、入出力装置、通信機器などの組み合わせだけでできるものではない。利用する人や組織はもとより、直接・間接に影響を受ける環境としての社会をも考慮する必要がある。当然のことながら、そこでは実社会との関連がきわめて重要となるが、このような観点から記述された情報システムの論文は、特に理工系学会では採録されることがあまり多くない状況にある。情報化社会の進展にともない社会のいたるところで情報システムが用いられ様々な影響を与えつつある現在、これは決して好ましいとはではない。このような状況を改善するため「情報システムと社会環境研究会」(以下、IS研)では、2005年3月より情報システム論文の特集号を発刊し、以降、毎年、論文誌特集号を刊行してきている。これは、とすれば技術に力点が置かれやすい本学会において、情報システムや関連分野の研究者に対して貴重な研究発表の場を提供していることにもなっている。さらにIS研では、単に場の提供だけでなく多くの投稿を促すとともに論文の質の向上を目指し、情報システム論文の意義や特質を理解し投稿者の意欲を喚起するため、年に数回「論文執筆に関するワークショップ」を開催している。

本特集号ではこれらの活動を背景にしつつ、これまでの特集号で対象としてきた情報システムの分析・設計・構築・運用、情報システムと人間・組織・社会との相互関連、さまざまな組織において情報化ニーズをとらえた新しい情報システムなどに続くものとして、社会の身近に存在する情報システムについて理論と実践の双方から扱う論文を広く募ることとした。

投稿された論文は、分野としては情報システム開発はもとより、農業・教育・医療・行政・組織運営など広範であり、投稿者の所属も大学や研究所だけでなく現場の担当者など多岐に

渡った。情報システムのライフサイクル的にも、企画段階から開発・運用段階まで幅広くカバーされ、投稿論文数は21件で採択された論文は4件となり、採択率は約19%となった。採録された論文の専門分野は、業務分析手法から運用管理の分析までの情報システム構築の全プロセスをカバーしている。また対象領域は、企業活動・農業や国際協力・災害対策など、これまで取り上げられることのなかった新領域の開拓もでき、また投稿論文の質も全体的に向上してきたと考える。しかし一方で、日本語の推敲不足(誤字・脱字、日本語として意味の不明な文)の論文が散見されたことは残念である。複数の著者による論文にもかかわらず推敲不足が目立つということは、共著者がきちんと推敲していないのではないかと疑わざるを得ないことにもなる。このようなことは、多忙な中で査読の労を取っていただいている査読者に対して礼を逸することにもなりかねない。最終的には著者のモラルに委ねることはあるが、ワークショップなどの啓蒙活動を通して啓発する必要があるものである。

最後に本特集号の機会を与えてくれた論文誌編集委員会と短い査読期間の中で迅速かつ丁寧、公平な査読をしていただいた特集号編集委員、査読者各位、スケジュール管理を含めさまざまな支援をいただいた学会担当者に深謝いたします。

「身近になる情報システム—理論と実践—」特集号編集委員会

- 編集長
刀川 眞(室蘭工業大)
- 編集委員(五十音順)
浅井達雄(長岡技科大)、阿部昭博(岩手県立大)、市川照久(静岡大)、
魚田勝臣(専修大)、大場みち子、金田重郎(同志社大)、
神沼靖子(本学会フェロー)、児玉公信(情報システム総研)、辻 秀一(東海大)、
富澤真樹(前橋工科大)、南波幸雄(産業技術大学院大学)、畑山満則(京大)、
樋地正浩(日立東日本ソリューションズ)、平賀瑠美(筑波技術大)、
弓場敏嗣(本学会フェロー)

^{†1} 国立大学法人室蘭工業大学
Muroran Institute of Technology